

西洋の音楽…

左手のためのピアノ協奏曲

【作曲者】

ラヴェル (Maurice Ravel, 1875－1937) は、20世紀初頭のフランス音楽の黄金時代を開花させた作曲家としてドビュッシーと並び称される。特に管弦楽法の職人芸的な素晴らしさは比類ない。

【楽曲について】

第一次世界大戦で右手を失ったピアニスト、パウ・ウィトゲンシュタインの依頼により作曲。ラヴェルのもう一曲のピアノ協奏曲(ト長調)と並行して作曲が進められた。

絢爛豪華な3管編成のオーケストラが色彩豊かな音楽を作り出す。(一方で、両手で弾かれるト長調の協奏曲は小さなオーケストラという対比が興味深い)。この時代、アメリカからジャズが入り、1928年渡米に際して接したジャズの語法を参考にしつつ、それがラヴェルならではの色彩をまわっているのが魅力と言える。(この渡米でガーシュウィンらにも会っている)。

下の譜例では、リディア旋法(長音階の第4音が半音高い。この譜例では嬰イ音)を用いつつも、ジャズの趣を持たせている。

【鑑賞のポイント】

怪我や病などの理由で右手が使えず、左手だけのために書かれたピアノ曲は比較的多い。最も知られたのはこの作品であり、古くはブラームス編曲のバッハの「シャコンヌ」など。こうした、限られた方法で演奏する作品を探すのもよいだろう。

また、ラヴェルの2曲のピアノ協奏曲を聴き比べ、作品の性格の違いを感じ取らせてみよう。

(伊藤康英)

ピアノの独奏パートより



スカラムーシュ 作品165b

【作曲者】

ミヨー (Darius Milhaud, 1892－1974 [フランス]) は、「フランス6人組」の一人。詩人であり外交官であるポール・クロードルの秘書として、1917年から18年までをブラジルで過ごしたことから、ブラジルの音楽やリズムが、彼の音楽に大きな影響を与えた。サンバを思わせるリズムや、ジャズなどである。また、複調性や多調性(同時に二つあるいはそれ以上の調性が鳴り響くこと)を用いることで、独特な響きをもたらす。

主要作品として、バレエ音楽「世界の創造」、ピアノ小品集「ブラジルの郷愁」、劇の付随音楽や映画音楽とあらゆるジャンルにわたって多数。吹奏楽では「フランス組曲」がよく知られている。

【楽曲について】

モリエールの喜劇『空飛ぶお医者』(演劇界では『トンデモ医者』と訳されている)の付随音楽(作品165a)に基づく2台のピアノ用の作品。1937年のパリ万国博での演奏のために作られた。後に自身によりサクソフォーンとピアノに編曲。サクソフォーンの重要なレパートリーにもなっている。

一方、ジャズ・クラリネット奏者のベニー・グッドマンのために、クラリネットとオーケストラのためにも編曲している。

「スカラムーシュ」とは、コメディ・デラルテと呼ばれる古いイタリアの即興喜劇の道化役。から威張りをする臆病者である。

第1曲 **Vif** (ヴィフ＝元気よく)。第2曲 **Modéré** (モデレ＝Moderato)。第3曲 **Brazileira** (ブラジルの女)。第3曲はサンバとなっており、親しみやすいリズムとメロディーが魅力である。

【鑑賞のポイント】

●さまざまな編成でこの曲に触れ、それぞれの楽器の編成による表現の違いを感じてみよう。

●2台ピアノ(ここでは2人の奏者が演奏)の音の厚みを感じ取ってみよう。

(伊藤康英)